

## Special Essay

### 「教科書に戻ろうよ」

医学教育学  
神代 龍吉

ずいぶん前に見たコピー機のテレビ CM を今でもよく覚えている。昔むかしのヨーロッパの教会で修道僧が経典を書き写す作業（写経）をしていた。おそらくグーテンベルクが旧約と新約の聖書を活版で印刷した 1455 年以前の時代設定であったろう。一生懸命にペンを走らせているその傍らで、最新のコピー機が次々に経典のコピーを吐き出し、20 部を一挙にソートし始め、それを見たお坊さんが腰を抜かすという CM だった。

学期末試験の頃、学生サロンのコピー機に人だかりができる。覗き見ると彼らはノートや対策プリントを大量にコピーしている。かつては分担解剖学、ハーパーの生化学、新臨床内科学、Minor 耳鼻科などの教科書を持ち運び、色とりどりのアンダーラインを引き、重要な部分は抜き書きしたものだ。朝倉の内科学なんかは詳しすぎて試験前には不消化のまま流れ去った。

しかし時間のあるときにゆっくり読めば病態生理が良く分かり、講義では教えない病気にも目が行って、ちょっとした周辺知識も身に付いていた。同じようなことは辞書でも言われている。パソコンで英和辞典を引くよりも、紙の辞書をめくっていると、思わず寄り道をして、目的にしていなかった単語を覚えたり、英米の文化に触れたりすることができる。だから辞書に親しむように勧められた。

このごろ学生さんは教科書を読まなくなった。その理由は、持ち運ぶにも、内容をこなすにも、いろんな意味で教科書は「重い」らしい。また講義するほうも教科書を使わないようになってきた。すべての講義についてシラバスを配っているが、教科書みたいに詳しいものもあれば、スライドのハンドアウトだけのものもある。ハンドアウトのみで学ぶのは、あまりに貧困学習ではないだろうか。教科書に回帰して寄り道しながらの学習に戻ってほしいものである。

教科書は 30 年前に比べて厚みが 2 倍くらいになった。だが講義で教える分量には限りがある。ぜひ教科書を見て補完してほしいものである。聞いたところによると福岡大学では入学間もない 1 年生全員に朝倉の内科学を買わせたそうだ。レポートを書く際の辞書代わりに使うらしい。ある時は枕代わりに使われるのかもしれないが、持っているのと持たないのではこの先、有意差がでるのではないかと大いに危惧するものである。

